

【一】 次の文章を読み後の問いに答えなさい。

あなたは、「プラシーボ効果」という言葉を知っているだろうか。

プラシーボとは、ラテン語で「人を満足させる」という意味で、ふつうはニセ薬のことをさす。一八
一一年版の医学用語辞典では、「患者に益することはなくとも、気やすめになる薬の通称」と書かれて
いたようだが、²今はちがう。

カリフォルニア大学医学部の若い研究者たちの^Aユウメイな実験がある。

「これをのんだら痛みはおさまります。」

と言って、小麦粉のようなニセ薬をあたえると、ホントウに歯の痛みがおさまったりする。これを、「プ
ラシーボ効果」というのである。

アンドルー・ワイルという医学者は、『人はなぜ治るのか』（日本教文社）という本の中で、この「プ
ラシーボ効果」がはたらくには、三つの信念の相互作用が必要だとして、つぎのように言っている。

「患者と医師が、たがいに信じあっていること、そして、患者が医師の治療法を信じていること。医師
もその患者をなんとか救ってやるぞと、つよく思っていること。この三つの要素が最適条件ではた
らくと、薬理的にはまったく意味のない薬でも、心に影響をあたえて、患者の症状がよくなったり、
^Bシヨウシツしたりして、時に完全になおってしまったりする。」

この「プラシーボ効果」は、生まれつき人間のからだには、自然の治癒力^{ちゆりき}がそなわっているというこ
とを証明しているのだと思う。その気になれば、治癒力がはたらき出すということである。

治癒における^Xの重要性は、その薬の本体がなんであろうが、病気がなるといふメカニズムが、
心という非物質的な世界にむすびついていることを教えてくれる。まさに、

「嘘も方便」

というわけである。方便とは、^{注1}衆生を教えみちびくたくみな手段、目的のために利用する^{注2}便宜的
な手段のことである。

学校の先生だって、ウソをつく。できのわるいどうしようもない生徒にたいして、

「おまえはダメだ。」

と言うのではなく、

「ほんとうは、キミはできるのだから……。」

と激励する。そして、その気になるとホントウにそのうち、できるようになったりする。

ここところは重要なので、よく考えてもらいたい。――³人間は、単なる一個の「わたし」ではな
く、おおくの「わたしたち」で構成されているということだ。^A人間は、その気になると、しだい
にかわっていく。

^B、息子の成績表をみて父親が、

「こんな成績では、おまえはゼッタイに大学には入れない。」

と言ったとする。

「じゃあ、お父さん、賭けよう。ぼくが大学に合格したら、^{注3}ミニ・クーペを買ってくれる？」

「ああ、いいとも。合格したら、喜んで買ってやる。どうせ、おまえみたいな成績では合格できつこな

いのだから。」

息子が猛烈に勉強しはじめ、大学に合格してしまう。父親の断言はウソだったことになる。車を買っ
てくれなかったら、父親は二重にウソをついたことになる。

もともと、父親がそう断言したことは、じつは、息子を発奮^{はつぷん}させたかったからで、実際には、合格す
れば大喜びだろう。

とにかく、人間は、単なる一個の「わたし」ではない。「成績のわるい子」と言われても、そこにと
どまっている必要はない。あなたの過去を、あなたの未来にしてはいけないのだ。

アメリカの心理学者エイブラハム・H・マスローがあるとき、彼の学生たちにたずねた。

「キミたちのうちで、だれが自分の専攻分野で偉業^{いぎょう}をなしとげると思うかね？」

教室中の学生たちは、ぼんやりしてマスローをながめている。ながい沈黙のあとで、マスローは言っ
た。

「それは、キミたち自身だよ。キミたちでなくて、いったいだれなんだい？」

学生たちは、ようやく、⁴マスロー先生の意図を理解した。

これが、わたしたちが一般にもっている無意識のあやまち――⁵どうせ自分なんか不運であつて重要
な存在ではないとみなす確信――ヨナ・コンプレックスなのである。

クジラのお腹のなかで三日三晩ねむっていたヨナの話は、旧約聖書のヨナ書にでくる。エホバ（主
なる神）から重大な⁶任務をあたえられるが、

「どうせ、わたしのような人間には、そんなむずかしい仕事はできない。」

と考え、船にのつてにげてしまう。

^C大嵐がやってきて、船がしずみそうになる。船長以下、船にのっている人びとが荷物をなげす
てたりして、船をたすけようと夢中で働いているのに、ヨナは一人で船底でねむっている。

船乗りたちは、怒って、ヨナを海に投げこむ。そして、クジラにのみこまれる。

このヨナのように、わたしたちは、どうせわたしなんかと考え、努力せずに、にげようといふ
傾向がある。

⁶クジラのお腹のなかにいるように、あらゆるものからまもられて、めんどろなことは⁷一切さけ、頭
から毛布にくるまってねむっていたい。これをヨナ・コンプレックスと呼ぶわけだ。

^D、心をあらため、もう一人の自分を発見するようにしないと、現実が変わっていかない。ヨナ・
コンプレックスはだれもがもっている劣等感だ。

しかし、そのことを意識し

「おまえなんかにながでできるか。」

と言われたら、その断言をウソにしてしまうように、未来にむけて自分をのばさなくてはいけない。

（赤塚行雄『ウソをつくる力 人はなぜウソをつくのか』より）

^{注1} 衆生……この世の中に生きているすべてのもの。

^{注2} 便宜的……ものを都合のいいように一時しのぎにするさま。

^{注3} ミニ・クーペ……自動車のこと。

問一 二重傍線部A「ユウメイ」、B「ショウシツ」、C「ゼツタイ」をそれぞれ漢字に直し、D「任務」、E「一切」の読み方をそれぞれひらがなで記しなさい。

問二 空欄A、Dに入る語として適切なものを次の中からそれぞれ記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使ってはいけない)

A けれども イ たとえば ウ だから エ すると

問三 傍線部1「ブラシーボ効果」によって証明されることがらを記した部分を本文中から三十三字で抜き出し、初めと終わりの五字で答えなさい。

問四 傍線部2「今はちがう」とはどのような点で以前とは「ちがう」のか。それを説明したものとして最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- A 実際に、患者の症状が改善されている例が存在しているという点。
- イ どんな薬でも、薬理的な意味はあり、「ニセ」とは言えないという点。
- ウ 「ブラシーボ効果」に対して疑問を感じる医師が多数いるという点。
- エ 患者に対して効果のない薬を処方することは禁止されているという点。
- オ 病気が治るメカニズムは、患者の心の問題だけではないという点。

問五 空欄Xに入る語として最も適切な熟語を次の中から記号で答えなさい。

- A 満足 イ 目的 ウ 断言 エ 信念 オ 手段

問六 傍線部3「人間は、単なる一個の『わたし』ではなく、おおくの『わたしたち』で構成されている」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- A 人間は結局のところはたった一人で生きていくことはできない存在であるということ。
- イ 一人の人間が生まれるためには、両親や祖父母など、多くの存在が必要だということ。
- ウ 人間の個性は、その個性に影響を与えた多くの他人によって成り立っているということ。
- エ 人間はずっと同じではなく、今の自分から発展・進化して新たな自分を発見できるということ。
- オ 一人の人間は多くの細胞ひとつひとつの集まりによってできあがった存在であるということ。

問七 傍線部4「マスロー先生の意図」の具体的内容として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- A 自分の将来に自信を持っている学生が何人入学してきたのかを知りたいという意図。
- イ 偉業をなしとげるような学生はキミたちの中にはいない、という厳しい現実を伝える意図。
- ウ 自分が関わった学生の中から、偉業をなしとげる者の出現を願う気持ちを伝える意図。
- エ 人よりはるかに優れている自分自身を自覚し、誇りを持って勉強して欲しいと伝える意図。

オ 自分が偉業をなしとげるつもりで、あきらめず困難に立ち向かい努力して欲しいと伝える意図。

問八 傍線部5「どうせ自分なんか不運であって重要な存在ではないとみなす確信」を簡潔に表現した三字の語を本文中から抜き出し、記しなさい。

問九 傍線部6「クジラのお腹のなかにいる」と表現されている状態と同じものはA、そうでないものはBを記しなさい。ただし、すべて同じ記号で答えた場合は採点の対象としない。

- A あなたの過去をあなたの未来にする。
- イ 単なる一個の「わたし」でいる。
- ウ 医師を信じた患者が、ニセ薬で病気が治る。
- エ もう一人の自分を発見する。
- オ 学生がぼんやりしてマスロー先生をながめている。

問十 この文章にはタイトルがついている。次の空欄を、傍線部3より前の本文中の六字を用いてうめて完成させなさい。

「 」ということ

二 次の文章を読み後の問いに答えなさい。

体育館を出ると、陽はもうだいぶかげっていた。夕暮れが早くなった。渡り廊下を吹き抜ける風が、
梢に残っていたイチヨウの葉をばらばらと落としていく。

首に掛けたタオルで顔の汗を拭いた。火照った頬は、外の風にあたるとたちまち寒さにこわばってしまふ。今度の週末にはコタツを出そう。タンスにしまいつばなしたコートも出して、にぎり湯タイプの入浴剤をまとめ買いしよう。教師になって五度目のXが、もうすぐ終わる。

「せんせい、バイバーイ」「またねーっ」「お疲れーっ」「でしたーっ」

体育館から駆けだした子どもたちが、次々にわたしを追い越していく。コートを一時間走りまわったあとも、元気がありあまっている。男女とりまぜて、小学四年生から六年生まで――「若さ」と「幼さ」の狭間にいる年頃だ。ふわふわとした無邪気さは体や心から少しづつ失せても、まだ「思春期のヨロイ」をまとうほどではない。甲高い声をあげながらボールを追う姿を見ると、ときどき、命が丸裸になつて走っているような気さえする。

「服を着替えてから帰らないと、風邪ひいちゃうわよ」

子どもたちの背中に声をかけた。「はい」「うーっす」と返事はしても、どうせ体操着のまま汗も拭かず更衣室で騒ぎ、教室で騒いで、寄り道しながら、陽が暮れきるまで家には帰らないのだろう。まあいいけど、と苦笑してタオルを首に掛け直したとき、後ろから「せんせい」と呼ばれた。男の子の、ちよつと沈んだ声――六年生の石川くんだった。

「今日、サイコーだったね。ジャンプシュートよく決まってたじゃない」
笑ってあげた。「せんせいが、いいパスたくさんくれたから」と首を横に振った石川くんも、「シユー

トを決めたのは石川くんの実力だよ」とつづけると、やつとはに cand 頬をゆるめた。

「お母さんと話をしたの？」

笑顔のままで話しかけたけど、石川くんは頬をすぼめてムゴンでうなずいた。

「やっぱり、受験に集中する？」

「はい……」

石川くんは中学受験をする。二学期が始まった頃からずっとなやんでいた。受験勉強に打ち込むためにバスケットボール部をやめるか、受験をしない友だちと一緒に卒業までつづけるか。その結論が、十一月も半ばを過ぎて、やっと出た。今日が石川くんにとっては最後の練習になる。

「まあ、²そのほうがいいかもね。受験は一生のことなんだし、バスケットは中学に入ってからまたやればいいんだから」

去年も、おとしも、そして今年、もっと早い時期にバスケットをやめた子どもたちにも、同じことを言ってきた。「部」といっても大会を目指す本格的なものではない。放課後に体育館を使って、練習をしたりミニゲームをしたりするだけだ。四年生以上なら誰でも参加できるし、いつでもやめられる。なんとなく、常連が生まれ、なんとなく「バスケット」と呼んでいるだけで、受験勉強と引き換えにつづけるようなものではないことは、わたしも認める。

「お母さんから聞いたけど、今度、特訓コースに上がったんだって？　すごいじゃない」

駅前の進学塾でいちばんレベルの高いコースだ。十月の模試で好成績をとったので、それまでの錬成コースから昇格した。バスケットをやめさせることを電話で相談してきたお母さんは、昇格のよろこびよりも、むしろ次の模試で失敗して降格されることを案じて、「受験まで特訓コースでやらせたいんです」と繰り返した。だからもうバスケットはできない。よくわかる。ものごとに優先順位をつけなければなら
ない時期が来たんだ、とも思う。

「バスケットはちょっとだけお休みして、いまは勉強をがんばってよ。せんせいも応援してるから」

ねっ、と笑いかけた。でも、石川くんは黙ってうなずくだけだった。

「受験が終わったら、また練習においでよ」

下を向く角度がさらに深くなる。①というより、②、というより、③。

そんなに落ち込むことはないのに。六年生の受験組で最後までバスケットをつづけた。うまかったし、なによりバスケットが好きだった。それだけで、もう、じゅうぶんなのに。

私はあらためて笑顔をつくって、つづけた。

「みんな待ってるから」

すると、石川くんはうなだれたまま首を横に振って、消え入りそうな声で言った。

「タクが、もう来るな、って……」

「小島くん？」

「……⁴裏切り者って」

小島卓也くんは、石川くんと大の仲良しの同級生だ。四年生の四月にバスケットに入ったときも、二人そろって体育館に来た。バス練習も、シュート練習も、^{ワンオン}1 on 1のときも、いつもコンビを組んでいた。直接のクラス担任ではないわたしにも、二人の仲の良さはよくわかる。

「小島くん、最近ずっと休んでるね、練習」

「……だって、オレがいるから」

「どういうこと？」

「オレの顔なんて見たくないから、あいつサボってる。だから、明日から来るよ」

ため息を呑み込んで「教室にいるときはどうなの？」と訊くと、石川くんは「ずっと無視されてる」と声を震わせた。⁵ひよろつと背の高い体が、急にしぼんだ。これ以上話をつづけると泣きだしてしま
うかもしれない。

「すぐに仲直りできるって。小島くんだってわかっているんだから」

軽く言って、「受験が終わったら、また名コンビ復活だよ」とも付け加えた。

石川くんもやっと顔を上げて「うん」と応えた。「さよーなら」と会釈して駆けだす背中に「勉強が
んばれーっ」と声援を送ると、走りながら振り向いて笑った。

私の激励に、かえって気をつかったのだろうか。それとも、ほんとうに、少しでも元気になって
くれたのだろうか。

どっちにしても、石川くんは賢い子だから、⁶やがて気づくはずだ。勉強がロトクイではない小島くん
も、もしかしたら先に気づいていて、だからすねてしまったのかもしれない。

二人の名コンビは、復活してもすぐにまた終わってしまう。小島くんは地元の公立中学に進学する。
石川くんは私立を何校も受験すると言っていたから、よほどのことがないかぎり、どこかに受かるだろ
う。小学校を卒業すると、お別れだ。そして、その後の二人の人生が交わることはもうないだろう。

わたしはそれをよく知っている。

知っているのに、子どもたちには「いまの友情は永遠だよ」などと言う。

そんな自分が、ときどき、嫌いになる。

(重松清『ロング・ロング・アゴー』『永遠』より)

問一 二重傍線部A「幼さ」、C「常連」の読み方をそれぞれひらがなで記し、B「ムゴン」、D「トク
イ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 空欄 X 入る季節を漢字で答えなさい。

問三 傍線部1「思春期のヨロイをまとう」に使われている表現方法として最も適切なものを次の中か
ら記号で答えなさい。

A 対句 イ 倒置法 ウ 隠喩 エ 直喩 オ 体言止め

問四 傍線部2「その」の内容を説明した部分を本文中から七字で抜き出し、記しなさい。

問五 傍線部3「ものごとに優先順位をつけなければならない」について、内容を説明した次の文章の
空欄 A・B に本文中からそれぞれ四字で抜き出し、完成させなさい。
これからの一生のことを考えて、A よりも B を大切にすること。

問六 空欄 ①・②・③ に入れる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から記号で

答えなさい。

- | | | | |
|---|---------|----------|---------|
| ア | ① うつむく | ② うなだれる | ③ うなずく |
| イ | ① うなだれる | ② うながされる | ③ うつむく |
| ウ | ① うなずく | ② うつむく | ③ うなだれる |
| エ | ① うなだれる | ② うながされる | ③ うなずく |
| オ | ① うなずく | ② うなだれる | ③ うつむく |

問七 傍線部4「裏切り者」とあるが、なぜ小島君は石川君を「裏切り者」だというのか。理由として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 石川君が卒業までバスケット部を続けると思っていたから。
- イ 石川君が小島君よりレベルの高いコースに上がったから。
- ウ 石川君が別のメンバーとコンビを組むことにしたから。
- エ 石川君が自分の悩みを小島君以外の人に相談したから。
- オ 石川君が塾に行けることをねたましく思っていたから。

問八 傍線部5「ひよろつと背の高い体が、急にしぼんだ」とあるが、ここから読み取れる石川君の心情説明として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 親にバスケット部をやめさせられることに納得がいかず、いらだちを小島君に向けている気持ち。
- イ 自分のせいで、バスケット部に顔を出せないほど追いつめてしまった小島君に申し訳ない気持ち。
- ウ 先生に小島君のことを話してしまった自分の心の弱さを恥ずかしく思い、後悔する気持ち。
- エ 小島君からのいじめを先生に話したこと、今まで以上にいじめられることを恐れる気持ち。
- オ 仕方がないことだと思っではいても、仲のよかった小島君の言葉や態度を悲しく思う気持ち。

問九 傍線部6「やがて気づくはずだ」とあるが、何に気づくのか。その内容を「…ということ。」に続くように本文中より十九字で抜き出しなさい。

問十 「私（わたし）」の説明としてふさわしいものはA、ふさわしくないものはBを書きなさい。ただし、すべて同じ記号で答えた場合は採点の対象としない。

- ア 担任する二人の子供達の仲たがいを心配し、少しでも力になれるよう努力している。
- イ 冷静な判断を持ちつつも子供に愛情を注いでいるが、自分の態度や発言への疑問も持っている。
- ウ なかなか言うことを聞かない子供と、子供の考えを無視する保護者の間で悩んでいる。
- エ 教師になって五年目だが、子供の気持ちを理解することが苦手で、おどおどしている。
- オ バスケ部での指導を通して子供たちを観察し、抱えている悩みや現状を細かく理解している。

解 答 用 紙 (国 語)

受 験 番 号

氏 名

総 合 得 点

一

問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
	ア							A	D	A
	イ							B		
									E	B
	ウ							C		
	エ							D		
	オ									
										一 合計

二

問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
ア					A				A	
									(さ)	
イ									B	
ウ										
					B				C	
エ										
オ									D	
										二 合計

ということ

ということ